

ぼくは、ある学校の校庭に植えられたオリーブの木です。小学生の子どもたちが校舎に入ってくる通路の正面に、ぼくは立っています。ぼくは、毎日500人くらいの子どもたちを見ているのですが、子どもたちが、ぼくを見てくれることは、あまりありませんでした。

ある春の日。麦わらぼうしをかぶって、長ぐつをはいたおじさんが、長いはさみを持って、ぼくに近づいてきました。

「何をされるのだろう。とうとう切り取られてしまうのかな？」

ぼくがそう思ったのにはわけがあります。ぼくの枝は伸びほうだいで、あまり美しい姿ではなかったからです。

ところが、おじさんは、チョコチョコと、ぼくの枝だけを切っていました。伸びほうだだった枝は、半分くらいになり、体が軽くなった気がしました。

「これでさっぱりしたね。これまで放っておいたからな。うん、きれいになった。」

と、おじさんは、一人言のように言いました。

そんな姿になったぼくに、何人かの子どもたちが気付いてくれましたが、それからしばらく、子どもたちは学校には来ませんでした。夏休みでもないのに、学校は長いお休みになったからです。

それから半年が過ぎました。季節は秋の終わりになっていました。ぼくは、相変わらず毎日子どもたちが登校してくる姿を高い所から見っていました。

そんなある日。また、長ぐつをはいたおじさんが、ぼくに近づいてきました。おじさんは麦わらぼうしをかぶっていませんでした。もう、暑くなくなったからでしょうか。

おじさんは、また、チョコチョコと、ぼくの枝を切り始めました。今回は、おじさんが高いはしごの上から、ぼくの頭のとっぺん辺りをどンドン切っていました。ぼくは、身動きができないので自分の姿を見ることができません。でも、前と同じように、体が軽くなったような気がしました。

「うーん、半年前から考えていたけど、何とか形になったなあ？明日、子どもたちは、気付いてくれるかな？」

と、おじさんは、また、一人言のように言いました。

次の日の朝、ある子どもが、ぼくの姿に気付いて言いました。

「オリーブの木が、ハートの形になっているよ！」

「ほんとうだ！ハートに見える！」

ぼくは、生まれて初めてたくさんの子どもたちに見てもらうことができました。

ぼくを見上げる子どもたちの笑顔を見ていると、少しはすかしいけれど、何だかとても幸せな気持ちになりました。



### 【なかよし集会での話】

各クラスの代表の人が、学級の「なかよしめあて」の振り返りを発表してくれました。どのクラスも、しっかりと目標を立てて、その目標に向かってがんばっていることが伝わってきて、とても嬉しく思います。

人というものは、目が向いている方、見ている方に進んで行きます。だから、「目当て」や「目指す」という言葉は、「目」という漢字が使われます。行きたい方向、なりたい自分やクラスをしっかりと持っていることで、そこに向かって必ず進んで行きます。クラスの目当てなら、一人ではなくて、みんなで協力し、支え合い、励まし合いながら進んで行くことができます。まだ、今年度は終わっていません。3月まで、クラスの目指すゴールに向かって進んでほしいと願っています。

さて、今日は「思いやり」ということについてお話します。ずいぶん前の事ですが、「思いやり」という言葉は、「思ってやる」みたいに上から目線（相手を下に見ている）だということで、あまり学校では使われなくなった時期がありました。代わりに「思い合う」という言葉が使われたのです。しかし、「思いやり」とは、「思ってやる」のではなく「自分の思い（心）を相手の思い（心）にやる（移す）」ということだという考えで、再び使われるようになりました。分かりやすく言うとうこうことです。

皆さんには「思い（心）」がありますね。同じように周りにも「思い（心）」がありますね。思いやりとは、自分の「思い（心）」を、相手の「思い（心）」にワープすることなのです。例えば、何か失敗をしたお友達がいたとします。その人の心に、自分の心をワープしてみましょう。詫間小学校の皆さんは、全員、自分の心を、友達の心にワープする力をもっていますよ。そうすると、「今、しまったと思っているだろうなあ。」とか、「みんなにバカにされるかも知れないと悲しくなっているだろうなあ。」とすることができます。そう思うと、その失敗を責めたり、バカにしたり、笑ったりは決してしないはずですよ。

詫間小学校の皆さん。自分の「思い（心）」を、相手の「思い（心）」にワープする力を、もっともっと発揮して、おもいやりの心であふれる学校にしていきましょう。

この会をしてくれた児童会の皆さん、代表で発表してくれた皆さん、ありがとうございました。これで、校長先生のお話を終わります。

### 【6年生の鼓笛の納会（引継ぎ式）での話】

6年生の皆さん。今日は、感染を防止するため、窓を開けてこの会を行いましたので、とても寒かったと思います。窓を全開するようお願いしたのは校長先生です。そんな中でも、大変立派な演奏をありがとうございました。演奏だけではありません。態度も、最上級生にふさわしい立派なものでした。そこから、立派に成長した「心」も見えてきました。今日で6年生の皆さんの鼓笛については、その全てを納める（おしまいする）ということになります。納める会のことを「納会」と言います。これまで、本当にご苦労様でした。ありがとうございました。

そして5年生の皆さん。寒い中、大変立派な態度で、6年生の最後の鼓笛演奏を聞いてくれました。ありがとうございました。6年生は、後3か月で卒業していきますが、5年生の皆さんなら、今の6年生に負けないくらい立派な最上級生になると校長先生は、今日、確信しました。

さて、例年ですと6年生の皆さんが5年生の皆さんに、それぞれのパートを教えて引継ぎを行うのですが、新型コロナウイルスの感染が広がっているため、今は、楽器を決めたり、練習したりすることができません。また、この後、感染状況がどうなるのか、来年度の運動会はできるのか、他の行事はできるのかなど、全く分からない状態です。ですから、6年生からの鼓笛のバトンは、一旦、先生方を代表して校長先生が受け取ります。そして、状況を見ながら、今後どうするのかを決めていきます。その時期が、6年生が、卒業する前なのか、卒業した後なのかは分かりません。ですから、鼓笛のバトンは、一旦校長先生が受け取っておきます。今日は、6年生が鼓笛の演奏を納める日、そして、最上級生としての「心」を5年生が引き継ぐ日だと考えてください。

6年生、5年生の皆さん。今日は、とても立派でした。さすがです。誇りに思います。これで、校長先生のお話を終わります。（私は、6年生、5年生の態度を見て、涙ぐんでしまいました。）

## 石油ストーブの思い出

小学生のみなさんは、「石油ストーブ？何それ？」と思う人もいるかもしれませんね。石油ストーブとは、灯油を燃やして部屋をあたためる物です。「何だ。ファンヒーターか！」と思った人。だいたいは合っています。灯油を燃やして部屋をあたためるということは同じです。しかし、ファンヒーターは、電気でファンが回り、灯油が燃えた熱であたたまった空気を送り出しますが、石油ストーブは風が出ません。単に燃えているだけです。「ますます分からない！」というみなさん。お家の方に聞いてください。保護者の皆様、もうしわけありませんが、子どもたちに説明してあげてください。

とにかく、私が子どもの頃は、この石油ストーブも高級品で、我が家には石油ストーブが1台しかありませんでした。もちろんエアコンは、一般家庭には、まずありませんでしたので、我が家の暖房器具は、こたつが1つ、石油ストーブが1台、七輪が1つ（「何それ？」というみなさん。お家の方に聞いてください。保護者の皆様、もうしわけありませんが、子どもたちに説明してあげてください。）だけだったのです。

寒い朝は、この石油ストーブの置いてある台所にいそいで行ったものです。すると、このストーブの前には、必ずといってよいほど、私の祖母がすわっているのです。石油ストーブには、丸い形の物と、四角い形の物がありました。丸い形は、ストーブの周り、どこからでもストーブのあたたかさという恩恵（おんけい）を受けることができます。しかし、四角い形のストーブは、後ろや横は全く、あたたかくないのです。鏡のような物がついていて、ストーブの前と上だけがあたたかいのです。祖母が、ストーブの真ん前ですわっているかぎり、私と姉は、ストーブの上しかあたれないのです。手をかざすと、さすがにあたたかいのですが、足をあたためようとすると、ストーブの天じょうに当たらないよう足を持ち上げなければいけません。ストーブの天じょうは、とても熱いからです。祖母は、ストーブの前で座り、ストーブの天じょうの上に餅（もち）をのっけて、焼いているのです。

祖母は、近所に住んでいるのに、なぜか冬の間だけ、毎朝、うちのストーブの前にやってきました。春から秋は、その姿を見たことがないのに…。「おばあちゃん、どいてよ！」とは、決して言えなかったのですが、私は、「寒い、寒い、寒い！」を連発し、祖母に何となくプレッシャーをかけていったものです。すると祖母は必ずこう言いました。

「今朝は、大霜（しも）やから冷えるのお。ほんだけんど、こんなに冷たい霜の日ほど、昼になったらあたたかくなるもんや。もう少しの辛抱（しんぼう）じゃ。もう少しの辛抱じゃ。」と、言いながら、餅をひっくり返しました。そして、焼けた餅を、私に差し出すのでした。

祖母は、あの言葉を私たち子どもに言うために、冬の間だけ私の家にやってきたのではないのか。何となくですが、そう思うのです。私に、「寒い霜の日ほど、少しがまんすれば、昼間はポカポカにあたたかくなるのだ。」ということを教えるために。いや、祖母が私に教えたかったことは、「霜の日のこと」だけではなかったのかもしれませんが、今になって思えば、人生とか生き方とか…。

朝ご飯がすむと、私は4歳年上の姉と学校に向かいました。登校班の集まる場所まで、姉と二人で歩いて行きました。

「ええこと教えてあげる。日かげは寒いから走るんやで。日なたになったら歩いたらええんで。」と、姉に言われ、その通りにしました。日かげを走ったおかげで、体はあたたまりました。朝の太陽が照らす道は、休みがてらゆっくと歩きました。登校班のみんなが待つ場所に着く頃には、寒かったこともすっかり忘れて、体はポカポカでした。そして、そんな日の昼休みは、もう上着をぬいても平気なくらい、祖母の言ったとおりの陽気になったのです。

なぜか、この季節になると、祖母と姉のあの言葉を思い出してしまいます。

## 陸上の選手だった私

実は、私は、こう見えても（どう見えているのかは分かりませんが）中学2年生くらいまでは、かなり強い陸上の選手でした。もう40年以上も前の話です。100mだと、11秒台の後半くらいが中学2年生の時の最高タイムだったと思います。高瀬中学校の陸上部に所属していた私は、県下では、3~4番目くらいの選手だったのですが、学校では2番目の選手でした。同級生に、県大会で毎回優勝する友達がありましたので……。学校でも1番になりたい（つまり県でも1番）と、考えるのは、毎日、陸上の事ばかりでした。

中学2年生の時に、ジュニアオリンピックという全国大会が東京であり、私の学校から3名と、丸亀東中学校から3名が選ばれ、県選抜チームを結成しました。当時は、この2校が、いつも400mリレーで優勝を競い合っていました。

2校から3名ずつの6名が選手で、リレーには4名が出場しますので、2名が補欠となるわけです。チームを結成した時には、私は4人のリレーメンバーの中に入っていました。ですから、予選の県大会では、私が第3走者で出場し、優勝してジュニアオリンピックという全国大会に出場することになったのです。この大会は、国立競技場で行われ、ここで走ることが私の小さい頃からの夢でしたので、その夢がついに実現すると思っていたのです。

県の予選が8月に行われ、全国大会は11月に開催されました。その間に、実は、私にとっては、とんでもないことが起こっていたのです。それは、県大会の時に補欠となった選手が、めきめきと力を伸ばしてきたことでした。私は、県で1番である同級生を一生懸命追いかけていたつもりでしたが、補欠となった選手は、もっとすごい勢いで、その何倍もの勢いで、私を追いかけていたのです。そのことに、私は全く気が付きませんでした。

9月になると、今まで、練習では負けたことがなかった補欠の2人と、30mのスタートダッシュで、時々、同タイムになることがありました。10月になると、とうとう私が負けることの方が多くなりました。100mのタイムトライアルをしても、私は記録が伸び悩み、一方、補欠の選手だった2人は、2人で競い合いながら、私をすんなりと追い抜いていったのです。全国大会前の最後のタイムトライアルでは、私は6人中の6番目で、とうとう補欠となってしまったのです。

11月に東京へ行った時は、とにかくおもしろくありませんでした。練習はいっしょにしても、あこがれだったリレーの舞台に立つことはできません。応援するだけなのです。ところが、チームは、予選を通過し、準決勝も通過し、何と決勝まで進んでいったのです。喜びリレーメンバーとともに、一応は喜んで見せるのですが、私の顔はとても暗かったと思います。心の中では「決勝には残ってほしくないなあ。」とまで思っていたと、今でもはっきりと言えます。でも、口では「ここまできたら、ぜったいに入賞をめざせよ！」と、メンバーに声をかけました。県大会で補欠だった選手は、「まかせとけ、お前の分までがんばるからな！」と言ったと思います。4人の姿が見えなくなった後、私はくやしくて、一人涙を流しました。決勝では、香川県選抜チームは、残念ながら最下位だったのです。私は、なんと、心の中で、ほっとしたのです。

今思えば、自分はわがままで、心が小さい人間だったと思います。きっとリレーメンバーの時には、補欠の友達の気持ちなど、全く考えることもなかったのでしょう。立場が変わって、やっと気付かされたのです。でも、それを中学2年生なのに、受け入れることができなかったのです。

しかし、この出来事は、その後の私にとっては「いい経験」となったと断言できます。今、こうして、当時の苦い思い出を、皆さんに読んでいただいているわけですから……。

そして、まだ、終わったとは思っていません。40年以上前の夢をあきらめているわけではありません。練習をして、60歳を超えてからでも、全国大会（マスターズ陸上）に出場したいと思っています。ですが、今は、人と競う前に、けがと持病との戦いの方が先です。一昨年までは、それでも何とかかまともに走ることができていたのですが……。リベンジです。勝手に終わらせたらいいけません。かなわなくてもいい、夢をもちましょと、子どもたちに言っているのですから……。

## おじそ様の思い出

私の家のすぐ近くには、高瀬川が流れています。高瀬川は、皆さんが住んでいる詫間町から海に流れこむのですが、高瀬町の高瀬川の川幅は、皆さんが見ている川よりもかなりせまいです。

私の家から5分も歩けば、高瀬川に着きます。そこには、短い橋がかかっている、橋の手前には小さな公園、橋を渡った所には、おじそ様があります。私は幼い頃、この公園で、隣の学校の子もたちと、よく遊んだものです。

話は少しややこしくなります。私が通っていた学校は勝間小学校です。私の家は、同じ自治会では、一件だけ離れた所にありました。正確に言えば、小学校に通っている子どもがいる家としては、自治会内では、一件だけ離れた所にありました、となります。しかし、私の家の近くには、たくさん子どもたちが住んでいました。お向かいは、歩いて5歩。でも、学校は上高瀬小学校なのです。簡単に言えば、校区と校区の境目に住んでいた私、そして、近くに住んでいた子どもは、全て、他の学校の子もだったということです。

とにかく、5～6人の子どもたちが集まって、その公園で遊んだものでした。「ガキ大将」という言葉を聞いたことがありますか？そのグループのリーダーみたいな人です。近所の子どもが集まると、その中で一番年上の子どもが、大きな権力を持つこととなります。民主主義、話し合いなど成立しません。その大将が決めたことが、絶対なのです。そんなのおかしい！と皆さんなら思うでしょうが、今から50年も前の話です。それが当たり前でしたし、それはそれで楽しかったのです。安心していただけました。言い忘れたら困るのは、大将は、この仲間の責任者でもありました。ですから、遊んでいてけがをした子どもがいれば、大将は、その子をおんぶして家まで運び、家の人に謝り、そして叱られる役もしっかりと果たすのです。違うグループとけんかになった時は、大将が「俺の仲間の手を出すな！」と、体を張って守ってくれたのです。私が小学校に入学するかどうかという時期、リーダーの小学校5年生や6年生は、当時の私から見たら大人で、あこがれの存在でもありました。

さて、事件は起こりました。いつも遊んでいた公園から、小さな橋を渡りますと、おじそ様がいらっしゃいます。その前には、いつもお菓子がお供えしていたのです。大将からは、「ええか、おじそ様のお供え物には、絶対手を出したらいかんぞ。バチが当たるからな。」と言われていました。そう言われると、ちょっと手を出してみたいくなるのです。おいしそうなおまんじゅうやら、おかきやらが、いつもお供えしてあって、私は子どもながらに、おじそ様は絶対に食べないと知っていたものですから、せっかくのお菓子ですから、おじそ様の代わりに、食べてあげようと思ったのです。いや、単に食べたかったのですが…。仲間がいたら、絶対に止められますので、みんなが集まる前に、そっと一人で食べてしまったのです。でも、そのことを自分一人の胸の中にはしまっておけず、私は、同い年の友達にそっと打ち明けたのです。「誰にも言わんとってよ。」と。でもその話は、すぐに大将の耳に入りました。大将は、私を叱りはしませんでした。厳しい私の祖母に言いつけてしまったのです。(今考えると「言ってくれたのです。」となります。)

それから1か月。私は、祖母と一緒に、毎日おじそ様の所に通いました。

「おじそ様、どうか、このバカな孫を許してください。この子は、バカなことはしますが、根は優しい人間です。どうかこの通り、お許してください。こら、お前も頭下げんか！」

と、おじそ様の前で正座し、毎日、毎日、同じことを繰り返しました。その行事が終わると、祖母は一人、家に帰って瓦屋の仕事に戻り、私は、いつもの仲間たちと合流して公園で遊ぶのです。

私が小学校の高学年になった頃から、このグループは自然に消えていきました。近所に子どもが少なくなったからというのも要因でしたが、近所というよりは、同じ学校の友達と遊ぶことが多くなったからでした。もし、私がこのグループの大将になっていたら、おそらく最初に、言ったと思います。「ええか、絶対におじそ様のお供え物には手を出したらいかんぞ！大変なことになるからな！」と。

## ギターの話

皆さんは、ギターという楽器を知っていますか？きっと見たことはあると思います。糸のようなもの（弦：げん）を指やつめ、プラスチックの板（ピック）ではじいて音を出す楽器です。弦は、長いと低い音を出しますし、逆に短いと高い音が出ます。普通は左手で弦を押さえて、その位置の違いで、音が高くなったり低くなったりします。また、弦は太さの違うものが4本、6本、12本とかあって、太いと低い音、細いと高い音が出ますので、弦の太さと押さえる位置の組み合わせで、いろいろな音が一度に出せる楽器なのです。

ギターにもいろいろな種類があります。木の箱のようにになっている部分で音を大きくして出すギターや、電気で音を大きくして出すギターがあります。木の箱のようにになっている部分で音を大きくして出すギターにも、フォークギターやクラシックギターなどがあります。フォークギターは、弦が全部金属でできていて、イメージですが「ジャーン」という音が出ます。一方フォークギターの弦は、ナイロンでできていて、こちらもイメージですが、「ポロローン」という音が出ます。フォークギターは、主に伴奏をするときに使い、クラシックギターは、伴奏と旋律を一緒に弾くときに使います。

さて、私は小学校5年生の時にギターと出会うことになります。きっかけは、両親がテレビで映画の『禁じられた遊び』というのを観たことです。映画の内容もさることながら、その映画の主題歌が、ギターの音色だけなのですが非常に美しく（名奏者ナルシソ・イエバスという方が弾いていた）、いたく感動した両親は、こう話したそうです。

「ええ曲やな。そうや、息子にギターを習わせよう。そうしたら、いつでもこの曲を聞くことができるからな。」

「そうですね、そうしましょう。」

ということで、両親はさっそく楽器屋さんでギターを注文したのです。この時代、インターネットはもちろん、CDなどありませんでした。100軒に1軒くらいは、家に、レコードを聞くことができる機械があったかもしれませんが、聞きたい曲があっても、一般家庭では、テレビやラジオで放送されるのを待つしかなかった時代なのです。

しかし、まちがいはここからスタートしました。両親が私の意思に関係なく買い与えたのは、フォークギターの方だったのです。当時は、フォークブームの始まりで、南こうせつ、アリス、松山千春、さだまさし、イルカなどのシンガーソングライター（自分で曲を作って自分で歌う人…きっと皆さんは知らないでしょうから、お父さんやお母さん、もしかしたらおじいさんやおばあさんに聞いてください。）がどんどん人気を高めていた時代でした。「ギターが弾ける（持っている）＝カッコいい」という時代でした。

当然、私が夢中になっていったのは、クラシックではなく、フォークの世界でした。中学や高校になると、バンドを組んで勝手にコンサートをしたり、勉強もせず貸しスタジオで仲間と練習したりの毎日でした。本気でシンガーソングライターになりたいと思っていました。両親からは、  
「この不良が！いいかげんにせんと、ギターを捨てるぞ！」  
と叱られました。高校を卒業する少し前まで、私はギターに夢中でした。

いつの間にか、ギターは弾かなくなってしまいました。その時のギターは、押し入れの中にさびついた弦が張られたままあります。ただ、『禁じられた遊び』の主題歌だけは、独学（誰にも習わないで自分で学ぶ）で弾けるようになりました。ギターを弾くのも大変で、弦を押さえる左手の指は、すぐに痛くなります。それをがまんして練習していくと、指の先が固くなって、痛くなくなります。皆さんが、鉛筆を持つ指にタコができるのと同じです。1年くらい前、人のギターを借りて弾いてみましたが、何十年も経っているのでもうまくは弾けませんでした。でも、ギターの音色はステキです。違った音がバーモニーとなって出てくるところが何とも言えません。機会があれば、皆さんの前で、あまり上手ではありませんが演奏してみたいと思っています。そんな日が来ればいいですね。



神田川の桜（私も親なのです。子どもはいつか巣立っていきます。）

「神田川」という川を知っていますか？東京のど真ん中、それこそお茶の水とか秋葉原とかの大都会の中を流れる一級河川です。この川は、南こうせつとかぐや姫というグループが歌って大ヒットした『神田川』という楽曲によって、全国的に有名になりました。

**あなたは もう忘れたかしら 赤い手ぬぐいマフラーにして 二人で行った横町の風呂屋・・・♪  
三畳一間の小さな下宿 窓の下には神田川・・・♪**

お父さんやお母さん、もしかしたらおじいさんやおばあさんに聞いてくださいね。この曲については・・・。（1973年発売 今から48年前）

ところでこの川。都心から少し離れた吉祥寺という町にある「井の頭池（井の頭公園の池）」が水源で、延長約25kmで隅田川という大きな川に流れ込みます。

さて、なぜ私がこの神田川の話をするのかということですが、話は4年前にさかのぼります。私の娘は、4年前の今頃、東京に引っ越しをしました。大学に通うためです。都心は家賃が高いので、都心から少し離れた吉祥寺付近の物件を探しました。実は、吉祥寺という町も大変人気があり、比較的、家賃が高いので、そこから急行で1駅の「久我山（ぎりぎり杉並区・23区内）」という町で部屋を決めました。井の頭線の久我山駅を出て小さな川（水路に見える）に沿って15分程歩いていくと、娘のマンションに着きます。実は、その小さな川が神田川なのです。井の頭公園から都心に流れている川なので、久我山という町を流れているのは当然と言えば当然なのですが、川の表示を見て「神田川か、あの神田川の上流なんだ！」と思ったわけです。

4年前の今頃、娘は一人東京に引っ越してきたのです。一度に送ることができなかった荷物を送った2回目の引っ越しの時に、私は手伝いに行きました。娘は、すでに東京で一人暮らしを始めていました。

部屋の片付けも終わり、私は香川に帰るために、娘は買い物に出るために二人で久我山駅まで一緒に行く途中、神田川沿いに見事な桜が咲いていました。

娘は、「神田川の桜が、めちゃくちゃきれいなんよ。でも、このことを共有できる人がいないんよ。」と、つぶやくように言いました。私は、「じゃあ、写真でも撮るか。」と、小さな橋の上から、神田川の桜をバックに娘の写真を撮りました。娘は、にっこり微笑みました。ちょっと淋しそうな笑顔に見えました。

あれから4年が経ちました。娘も今年、大学を卒業します。もう1年以上、大学には行っていません。そして、このまま卒業です。2月中には引っ越しをしてしまうので、娘が4回目の神田川の桜を見ることはないのかもしれないね。

